

## 価値概念について(完)

→その内容と意義→

まえがき

### 一、価値の通俗的意味

### 二、イギリス古典学派の価値概念

- (1) 経済法則のとらえ方
- (2) 商品価値の解釈
- (3) 古典学派価値概念の特徴と問題点

(イ) その特徴

(ロ) その問題点

### 三、マルクスによる科学的価値概念の確立

- (1) 科学的経済学の基本的視点
- (2) 社会存続の根本条件としての人間的労働
- (3) 労働の二面性の把握……(以上、本誌第四〇巻三号所載)
- (4) 商品の法則——労働の物化と自立化
- (5) 価値概念の骨格

価値概念について(完)

山本二三丸

- (イ) 価値の実体と価値
  - (ロ) 価値規定
  - い) 価値の人間支配……（以上、第四〇巻四号所載）
  - (6) 価値の結晶としての貨幣の全能
  - (7) 価格形態の特質
  - (8) 労働力の商品化と剰余価値
  - (9) 資本の全一的支配と人間社会の変質
  - (10) 擬制的「価値」による強力的収奪……（以上、第四一巻一号所載）
  - 四、価値概念の欠如した「経済理論」の反科学性と階級性
  - 五、資本主義社会における価値生産の客観的意義
  - 六、人間および人間社会にとっての人間の労働の一般的絶対的意義
  - 七、社会主義社会における価値生産の全面的廃棄
- 簡単な要約
- あとがき……
- （以上、本号所載）

#### 四、価値概念の欠如した「経済理論」の反科学性と階級性

(一)

これまで価値概念について、いろいろの側面から考察してきましたが、ここで「価値とはなにか？」という問題が出されたとして、それにたいして簡単に答えなければならぬとしますと、およそ、つぎのようなことが答えとして述べられなければならないのではないか、と思われまふ。それは、ひとことではいへば、どんな人間社会であつても、

その社会が存続するために必要不可欠な人間自身による人間労働力の支出、つまり社会を支える人間的労働というものが、私的所有にもとづいた特定の歴史的社会でとらなければならない特殊の形態こそが、まさに価値である、ということ。私的所有の社会では、その社会を支えている第一の根本要件である人間的労働は、必ず商品価値という特別の形態のものにならなければならないことになっており、また、商品価値という特別の形態をとることによって初めて社会を支える人間的労働であることが実証されますし、また実証されなければならない、ということになっているのです。

どんな社会でも、その社会を構成する人間は、およそ社会の存続に必要な人間的労働を負担しなければなりませんし、またそうした社会的必要労働を負担するかぎり、その社会のりっぱな成員であることを実証し、またそれによってりっぱな成員として認められなければなりません。そして、そのような真実の成員として認められるかぎりにおいて、その成員としての生活に必要なだけの生活手段を——社会的総生産物の中から——分与されなければならないことになっているのです。これが、すべての人間社会を通じて、普遍的に妥当しなければならない超歴史的な社会的自然法則であることはくりかえし申すまでもないところです。

ところが、社会の存続を支えるに必要な人間的労働が行なわれるための不可欠の物質的条件である生産手段が、本来は社会全体の所有に属すべきであるのに、その生産手段がその社会の成員個人の私的所有に属してその私的利益のためにのみ充用されるという、変則的な(abnorm)、不自然な(unaturlich)、または歪められた(verzerrt)歴史的社会においては、私的生産者の私的労働は、その労働そのものにおいては社会的労働と成ることも、また社会的労働と認められることもまったくできず、どうしても労働生産物・商品に対象化・物化してその商品そのものの価値と

ならなければなりません。そして、生産物・商品の価値となつてはじめて社会的総労働の一分子を担うもの、つまり社会の存続を支える社会的労働と成ることができず、またそのようにして社会的労働に成らなければならないのです。

しかし、私的生産者の私的労働が生産物・商品に対象化・物化して、その商品そのものの価値としてはじめた社会的労働に成ることができるとしても、その価値がどれだけの社会的労働をあらわしたものとすることは絶対にとらえることができないことは、さきにもよく見たとおりです。価値の大きさは、もともと、社会的平均的労働〇〇時間というように絶対的に簡単に規定されることはとうてい不可能であつて、どうしても特別の商品をもつてきてこれによつて、相対的に、いわば回り道をして表示されなければならないこと、このようにして、すべての商品の価値を表現する特別の社会的役割を与えられたものとして金貨幣が生まれ、その金貨幣の一定分量によつて各商品の価値の大きさを社会的に表示したものが、ほかならぬ価格であるということ、——これらのことも、私たちがこれまでの論究によつてはつきりととらえたところです。

ですから、価格というものは、私的所有にもとづく歴史的社会で、社会の存続を支える人間的労働が不可避免的に物化して商品価値となつたものの、この社会でだけ通用する不自然な相対的表現様式にすぎないものだ、といわなければなりません。言いかえますと、価格とは、価値という隠れた本質が、社会の表面で不可避的にあらわれる現象形態でしかない、ということですが、しかも、それは、現象形態の常として、本質をそのまま誤りなく、正確に現わすものでもなく、この本質からいくらでも乖離することができるばかりでなく、さきに見ましたように、虚構の、ありもしない「本質」をも表現するものとして、社会的に通用するものになつていっています。見方によつては、価格は、

本来、ひとつの現象形態にすぎないにもかかわらず、当の本質と無関係に、それ自身独自の運動・変化をくりかえすばかりでなく、その本質そのものを否定し、破壊する (vernichten) もとなつてゐる、ということができません。

「もし、現象と本質とが一致するならば、およそ科学は不要である」——この格言は、私が改めて申しあげるまでもなく、読者の皆さんのよくご存じのところと思います。そうです。私たちの目の前にある、感覚でとらえることのできる現象をとりあげ、これを分析して、その奥にかくされた本質を、いいかえますと、かくれた法則を究明し、こうして究明された本質または法則が、なぜ、どのようにして、そうした現象形態をとつて必然的に現われなければならないかということを知ること、——まさしくここにこそ、科学の本領があるのだということは、およそ科学という言葉を正確に理解するための基本だといえます。

価格というひとつの現象形態についても、科学としての経済学の取り扱いは当然右とまったく同じでなければならぬのは、いうまでもありません。価格とは、商品価値を貨幣の一定分量で表現したものですから、価格とはなにかということの分析は、当然に、貨幣とはなにかということの分析にならなければなりませんし、貨幣商品の分析は、必ず商品価値の分析にまでさかのぼらなければなりません。こうして、私的所有の社会で社会の存続を支える人間的労働が必然的に商品価値として物化・自立化する根拠が究明され、価値の実体と価値の大きさの規定が解明されることになり、これによって、はじめて、本質としての価値がなぜ、どのようにして必然的に貨幣の一定分量によって社会的に妥当に表現されなければならないかということ、つまり、本質・価値の必然的な現象形態としての価格が、正しく解明されるものとなるのです。このような正しい科学的方法によって、価値の分析から貨幣の必然性、現象形態としての価格の解明をやりとげているのが、ほかならぬマルクスの著書『資本論』であり、とくに、その第一巻第一

章から第三章までの叙述であることは、すでにくりかえし説明してきたところです。

(二)

ところが、世の中はまことに広いもので、同じように経済学という名称をいただきながら、価格という現象形態は熱心にとりあげながら、価値という概念はほんのこれぼっちも出てこずじまいになっている「経済理論」というものが、いろいろな編み出されています。

価値概念がまったく欠落している「理論」が、真の意味での科学の名に値するものとなりえないものだという事について、以下簡単に指摘しておきたいと思えます。

イ まず第一に挙げられるのは、さきに説明しました現象形態一辺倒という、俗物的見地です。価格は、価値という本質の必然的な現象形態であるということがとらえられなければ、総じて価格の内容については、まったくの無知に終わらざるをえません。そもそも、価格とはなにか、その質的内容はなにかと問われてならん答えることなく、ただ量的変動しか示しえないような「理論」が、はたして科学的な理論といえるでしょうか？ その現象形態の奥にかくされた当の本質を究明することができず、ひたすら目に見える現象形態にしがみつくと「理論」は、科学とはほど遠い俗物的「理論」といわざるをえないと思えます。

ロ 価値概念の欠如している論者にとって、貨幣の本質を科学的に解明することは、完全に不可能です。貨幣がどうして、どのようにして、なぜ、必然的に生まれてきたか——これを解明することは、科学としての経済学にとって第一の基本的課題です。貨幣の必然性を解明することはすこしもこころみようとせず、ただこの資本主義社会で貨幣の演ずる機能を、それも文字通り体裁よく説明してみせたところで、はたして貨幣の演ずる真の重大な機能が十分

に解明されうるでしょうか？

ハ 経済学が、一つのりっぱな歴史科学であること、それは人間社会の歴史的発展の経済法則を明らかにするものであること——このことは、私が申しあげるまでもなく、周知のところですよ。しかし、貨幣の必然的な生成の根拠とその過程について、価値概念なくして、どのようにして説明することができるでしょうか？ 商品も貨幣もまったく存在しなかった歴史的な諸社会について、そしてまた、それら諸社会の歴史的発展について、したがって、それらの社会が貨幣の支配する社会へどのようにして発展・移行してきたかについて、なにひとつまともな発展法則を説明することをこころみないような、またこころみようとすてもとうていおぼつかないような「経済理論」の在り方では、はたして歴史科学の名に値するものと言えるでしょうか？

こうした性格の「理論」は、別の見方からしますと、かつてのイギリスの古典学派と同じように、この資本主義社会をば未来永劫まで存続し繁栄を享受することになっている「文明社会」としてとらえているものだということが明らかです。しかし、イギリス古典学派の場合には歴史的知識も浅く、止むをえなかったとも言えますが、今日原始・古代社会からの歴史的発展過程も明らかにっており、しかも、この資本主義社会を根本的に変革して労働力の担い手たち自身が主人公としてふるまうべき社会主義社会を目指しての変革・建設の世界史的運動が広範にこの地球上で展開されているというときに、つまり、資本主義社会という「文明社会」の「永久存続」が歴史的事実によって完全に覆えられてしまっているこの現在の時点において、かつて歴史的知識も欠けており、繁栄への道を辿るかにみえていたときのいわば幼稚な「科学」としての古典学派と同じ「信仰」を基本にした「学問」とか「理論」とかいうものは、いったい、どういう価値があるというのでしょうか？

二 この種の「理論」では、貨幣の本質を把握することはまったく不可能です。「価値」を考えたミスヤリカードウのような、すぐれた、良心的な学者たちにしても、やはり、貨幣の実態を見究めることは、望めなかったものです。「便利な交換要具」として人間の手で製造された道具が、どうして人間をとことん支配する全能者に成りあがったのでしょうか？ 今日流行している価値概念の欠如した「経済理論」は、ひとつのこらず、貨幣の全能、その人間支配にまったく目を閉じて、あれこれ貨幣の機能を論じています。四〇〇年以上も前からシエクスピアによって暴露された貨幣の全能ぶり、そして、空想的社会主義者たちによって二世紀以上もむかしから指摘されている貨幣への人間の完全な隷属、貨幣による人間社会の腐敗と墮落というものが、今日でははるかに度を過したものになっているにもかかわらず、その「理論」の中でそれらのことが一度も指摘されず、その徹底的究明と貨幣の全能の完全な廃棄というものが熱心に解明され、主張されることのまったく欠けているような「理論」——これは、はたして、科学の名に値するものといえるでしょうか？ むしろ、これらの「理論」にたいしては、明確に、反科学的「理論」という規定をあたえるのが妥当ではないでしょうか？

では、貨幣の必然性をただしく究明することもなく、人間社会の歴史的発展過程についての科学的な分析も放り出して、ひたすら上っ面の現象形態だけの価格にしがみついて本質の究明など問題にしないという、驚くべき反科学的「理論」が、どうして、現在の資本主義社会においてりっぱな「経済理論」として通用し、経済学というれっきとした科学の分野にまでその支配的な影響力をもつようになっていのでしょうか？ その客観的な根拠としてまず考えなければならぬのは、こうした価値概念の完全に欠落した「経済理論」というものが、今日の資本主義社会の中で必ず發揮することのできるすばらしい実効的効用でなければならない、と考えられます。つまり、価値概念を明確に



している科学的理論によってはその当事者たちの享受していることえられない巨額の利得がどこから、どうして得られるかということが暴露される恐れがあるのにひきかえ、こうした価値概念をきれいさっぱり消し去って上っ面だけの価格だけを問題とするかぎり、そのような恐れもまったくなくなり、反って、その利得を「合理的」にますます膨れあがらせてくれることになるというところが、肝心なのです。端的に言って、そのような「理論」は、全能の貨幣を大量に所有するか、これを自由にすることのできる人々、貨幣を資本として最大限の価値増殖を狙う人々、そしてまた、擬制的な「価値」の操作によって巨額の現実的価値のまきあげをおしすすめている階層全体にとって、この上なく頼もしい理論的武器を提供してくれるものにほかならないのであって、そうした階級性の要点は、あらず、つぎのようなどころにあると考えられます。

ホ さぎに見たように（本誌第四一巻一号、一〇三ページ以下参照）ありとあらゆる方法によって強力的にかきあつめた大量の貨幣を所有してその全能を全面的に發揮させその利益を享受している所有者層にとつては、この「理論」のおかげで、その貨幣の起源を問われる恐れもなく、その非人間的な全能享受を批判される恐れもまったく無くなり、安心して大いにわが世を謳歌することが保証されることとなります。

へ 価値概念が欠落することによって、当然に剰余価値概念もすっかり消し去られてしまいます。資本家の獲得する利潤は、資本家の経営の手腕と労力によるものだとすることがりっぱに「論証」されることとなります。それと同時に、労働者に支払われる賃金は、労働者が給付した労働にたいするりっぱな報酬であつて、そこには搾取などという「いまわしい」ことは生ずる余地もないのだということが「確証」されることになり、このようにして、資本主義的経営は、永遠の繁栄を保証されることとなります。

ト 価値概念をすっかり清算してしまうことになって安心してしまった荒稼ぎのできるのは、土地の「ころがし屋」であり、これら張本人につながる受益者——ありとあらゆる金融業者から国家権力機関にいたるまで——御一統様です。

チ この種の「理論」のおかげで、まさに「打出の小槌」よろしく、いくらでも巨額の擬制的「価値」を製造して、勤労人民大衆からの最大限の収奪を保証されるのは、いうまでもなく国債を濫発するブルジョア国家権力ですし、またこのうちつづく大量の価値収奪によってその「おこぼれ」としてこたえられない利潤を保証されるのは、独占的大資本の階層に属する面々です。

このようにして見ますと、この發達した資本主義国で価値概念の欠如した「経済理論」がもし生み出されないとしましたら、それこそ奇怪時ともいうべきことになるのは必定、と言わなければなりません。なるほど、エンゲルスがその名著『ルートヴィヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終結』の中でかかっているヘーゲルのつぎの有名な命題は、まったく正鵠を得たすばらしいものと、いまさらのように感じさせられないではありません。

「現実的なものはすべて合理的である、合理的なものはすべて現実的である」<sup>(12)</sup>（マルクス・エンゲルス全集、第二一巻、邦訳大月版、二六九ページ）。

(12) これは、いうまでもなく、ヘーゲルの有名な哲学的命題ですが、しかし、この命題は実に広大な領域をその射程の中におさめているといわなければなりません。私がとりあげたのは経済学の分野のことですが、哲学の分野にあてはめるときどういうことになるかということも、参考までに見ておきたいと思えます。マルクス・エンゲルスのすぐれた後継者レーニンも、その晩年の一労作の中で、

「現代社会の哲学教授はたいていは實際上『学位をもった坊主主義の従僕』にほかならない」

と言ったヨゼフ・ディーツゲンの言葉を引いて、それについて、こう解説しています。

「ブルジョア的諸国で支配的になつて、それらの国の学者や評論家のあいだで注目をあつめていた哲学的諸流派についてのマルクス主義の基本的な見地を、正しく、的確、明瞭に表現したものであった」(レーニン全集、第四版、第三三卷、邦訳大月版、二二八ページ、傍点―山本)。

もし、ディーツゲンが、哲学ではなくて経済学の専門家であったとしたならば、価値概念の欠如した「経済理論」の「専門家」について、どのような評価をあたえたことでしょうか？

## 五、資本主義社会における価値生産の客観的意義

さきに「四」でも指摘されましたが、資本主義社会の存続と発展を支えている現実的な富、つまり物質的富は、ひとつ残らず人間の手を通じて、人間的労働によって、生産されたものです。ですから、資本主義社会を支える現実的富の総額は、この社会が自由にすることのできる労働生産物総量の価値総額をもって表示されうるものである、と行うことができます。いうまでもないことですが、この現実的富のなかには、擬制的「価値」しかもたないものはふくまれません。それは、文字どおり fictive (虚構の)であつて、人間の生活を支える現実的な富とはみなされようもないものです。現実的な富とは、生産手段としてであれ、もしくは生活手段としてであれ、人間の生存維持にとって欠くことのできないような役立ちをはたしうる自然的形態をりっぱにそなえているものでなければならぬからです。

ひとつの資本主義国についてみた場合、その国内でつくりだされる現実的な富、つまり価値生産の総額は、どのようにしてとらえることができるかと考えられるでしょうか？

人間の労働が行なわれて現実には富のつくりだされるどころ、言いかえますと、賃銀労働者の労働によって価値生産物が生みだされるところは、Industry（産業）の諸部門にかぎられています。Industry（産業）というと、どんな仕事であっても、ある一定の労働が行なわれてそこになんらかの収益を生ずるものはすべてこれにふくまれるものと考える向きも少なくないようですが、これは、Industry を職業と同じものにとらえる通俗的な考え方に従ったもので、厳密な理解とは言えません。Industry は、正確に価値生産物を現実に生産する労働によってなんらかの物質的富をあらたにつくりだす部門だけを指すものと解さなければならぬのです。ですから、たとえば、銀行・保険業は、職業部門ではありませんが、産業部門にはふくまれないものです。つまり産業部門とは、生産的労働の行なわれるところに限られているわけで、その具体例をあげてみますと、水産業、林業、農業、鉱山業、採油業、などといった第一次（または原始的）産業をはじめとして、農水産加工業、木材加工業、金属精錬・加工業、精油業、機械器具製造業、繊維・紡織産業、製紙業、土木建築業、電力・ガスなどの燃料・動力産業部門、運輸・通信業、等々がふくまれます。（たとえば、印刷出版業や広告業についても、そこでなんらかの物質的富が現実に生産されているかぎり、その物的生産物については、そこに生産的労働が、したがって価値生産が行なわれたものとみなされなければなりません。商業についても、運輸業と結びついているときには、やは、それ相当の考慮を必要としましょう）。

ところで、右にあげられたような各産業部門において、たとえば一年間に生産された使用価値（現物形態）と価値総額との総合計が、その当該国を支える現実的な富の総額であることと見ることができず（いうまでもありませんが、いまは、外国貿易により、また外国への資本投下にもとづく利子その他の貨幣収入によって、その国に流れこんでくる生産物は、考慮の外にしています）。しかし、各産業部門の生産物の具体的な現物形態はそれぞれがっていてこ

れを合計することはできませんから、結局、その一年間に生産された現実的富の総計としては、それら生産物の価値総額を貨幣をもって表示した生産物価格の総計だけが、その指標として役立てられなければならないことになりま  
す。ただし、ここで、私たちは、価値生産ということの意味内容について厳密な考慮を払わなければならないことに  
気がつくのです。というのは、労働生産物の価値の内訳は、労働者の具体的労働のおかげで生産手段から生産物に移  
転し保存される価値部分と、労働者の抽象的労働によって生産物のうちにまったく新たにづくりだされた純生産物  
価値生産物部分とから成っているものですし、後者の価値生産物部分はまた、労働力の再生産費に相当する価  
値部分とそれを超過してづくりだされた剰余価値部分とから成っていなければならないことが明らかであるからで  
す。誰でもよく知っているように、生産は、けっして一回限りのものではありません、必ずくりかえし再生産が行なわ  
れなければなりませんから、生産手段からの移転価値部分は、個人的消費に充てられうる富と見なすことはでき  
ません。それは、翌年の再生産のために、総生産物全体の中から控除されなければならないものです。

ですから、一国を支える現実的富の大きさ、言いかえますと、その国民が一年間に消費しうる現実的富の大きさは、右に述べましたように、すべての産業部門において、労働者の生産的労働によって生産された生産物総計のうちから、翌年の再生産に充てられるべき生産手段増補分の価値合計を控除したもの、言いかえますと、一年間に労働者の生産的労働によって新たに生み出された純生産物に価値生産物総計、つまり、労働力の再生産費に価値合計と剰余価値総額とを合わせた額である、ということになります。

右に示されましたように、資本主義社会を支えている現実的富として、その国民全体によって個人的に、つまり不  
生産的に消費されうる純生産物総額、または労働者階級の労働によってその一年間に新たに生産された価値総額――

これは、理論的には、価値生産物の総額といわれます——は、きわめて重要な、見方によっては決定的ともいうべき意義をもっているもので、この点を私たちははっきりと把握しておくことが肝要と考えます。そこで、その重要な意義について、その主なものをつぎにあげることになります。

まず第一に指摘されなければならないのは、それは、当該資本主義社会がそなえている、もしくはそなえることができる生産力の水準がどれだけの高さにあるかを示す一つの確実な指標であるとみることができます。その価値生産物総額をさきあげた産業諸部門で働いている生産的労働者総数で除すことによって、私たちは、生産的労働者一人当たり平均一年間に生産される価値生産物の大きさをとらえることができます。これは、その資本主義国の生産的労働者の労働の生産力の高さを示すもつとも正確な指標と見てはば誤りないものと思われまます。

第二に、右の生産的労働者一人当たりの価値生産物の価値額を、同じく労働者一人当たりの平均賃銀額とつきあわせることによって、私たちは、資本家階級による賃銀労働者階級の労働の平均的搾取度、もしくは基本的搾取度ということも、ほぼ誤りなくとらえることができると思われまます。つまり、年一人当たり平均価値生産物の価値額から年一人当たり平均賃銀額を控除することによって、労働者一人当たりから資本家がそのふところどこにどれだけの剰余価値額をまきあげたかということ、つまり、 $m$ の平均額がおさえられますので、ここから剰余価値率 $\frac{m}{v}$ 、または労働の搾取度というものをとらえることができるというわけです。

第三に、右の価値生産物総額は、賃銀労働者階級全体の乏しい生活を支えながら資本家階級のありあまる豊かな生活を保証するものであると同時に、なおその上に、資本の拡大再生産つまり資本蓄積のために必要とされる追加分を填補するという、三つの、それぞれ異なる、重要な用途に充てられるべきものである、ということです。ですから

ら、資本家階級による資本蓄積が大いに増強されて蓄積ファンドに回される価値額がより大きくなればなるほど、労働者階級の上に落ちてくる乏しい生活ファンドの総額は、それだけより小さくならざるをえない、ということにもなるわけです。

第四に、右に指摘されました蓄積ファンドに充当される価値生産物の額こそは、その資本主義国が自由にしうる経済力の限度、または高さの限界を正確に示すものだという点があげられます。このことを疑う余地なく実証したのが、第二次世界大戦における交戦国の戦争経済であって、そこでは戦争経済とはどういうものか、そしてまたその大きさはどうしてきまるかということが、動かしがたく実証されたものです。近代的戦争は、むかしのように、一、二回の大会戦で勝敗がきまるというようなものではまったくなく、かなり長期にわたる大規模な、しかも年を追って拡大する消耗戦争にほかなりませんから、交戦国は、年々増加する規模の消耗に堪えて、なおますます拡大する兵器、資材、補給品その他の軍需物資の供給を確保するために、右の蓄積ファンドに充当されるべき価値生産物総額をこれにあてなければなりません。ですから、蓄積ファンドに充当されるべき価値生産物総額の大きさによって、どの程度の規模の消耗戦に、どのくらい長く堪えられるかということは、容易に判断されうるところとなります。蓄積ファンドに充当されるべき価値生産物総額の比較的小さく、しかも兵器生産に必要不可欠の原材料の絶対的欠乏という自然事情のもとにあった日本は、数年ならずして軍需生産の低下、労働者階級の生活ファンドの大幅削減ということになり、平和産業資材の軍需産業原材料への転換をもってしても単純再生産の縮小再生産への急速な転落・悪化は免れることもできず、鍋、釜の供出、カンコロ飯から竹槍、わらじというところまで追いつめられて、ついに惨憺たる敗北におちいらざるをえなかったのですが、このことは、すでに戦争開始後間もなく右に示したような蓄積ファンド

の把握による交戦諸国の戦争経済力の正確な調査研究によって、疑う余地なく、数字をもつて把握され、い、え、いたころでもあったのです。<sup>(13)</sup>

(13) ついでながら、イギリスについて申しますと、英本国（グレート・ブリテン）における蓄積ファンドに充当されるべき価値生産物総額は、それほど大きいものではないと考えられますが、イギリスの支配下にある広大な植民地・従属国から流れこむ現実的富の額ははかり知れないほど巨きいものがあり、これが強大な海軍力・輸送力によってイギリスの戦争経済力を大幅に増強するものとなりました。かつてマルクス・エンゲルスが告発してやまなかつたイギリス労働者階級の上層部分の労働貴族化も、第二次大戦後相次ぐアフリカの民族独立解放闘争にたいしてイギリスの武力強圧を終始極力主張してやまなかつたイギリス労働組合会議（TUC）の在り方も、そしてまた、イギリス社会の滔々たる右翼・保守化という現象も、これらすべては、イギリスに流入してやまない無償・巨額の現実的富の存在によって必然的に規定されているものと見ることができまし、よう。

以上述べてきましたところを念頭においてみますと、価値概念の欠如したただの擬制的「価値」しか眼中になく、ひたすら実体のない価格ひとつにしがみついで離れられないさまざまな「近代的」な俗流理論というものが、一国の有する真実の経済力を正しく認識することもできなかつたものであり、現在もまたそうであるということは、明らかなどころといえます。何十兆円にのぼる有価証券類、とりわけ莫大な額の国債というものが、一国の真実の経済力の高さを示す指標として、またその水準を高める新たな価値をつくりだすものとして、ど、れ、だ、け、の、意、味、を、も、つ、こ、が、できるかは、すでに第二次大戦の苛烈・惨憺たる経験が、私たちに身にしみて思い知らしてくれただころではないでしょうか？ 一国を支える経済力は、労働力の担い手である勤労人民大衆のまさに汗と膏と血によってあがなわれた価値生産物総額のうちにこそ正確に示されるものであって、さまざまな擬制的「価値」は、それらのうちからできるだけ多くのものを「合法的」に搾取・収奪するためのものにほかならないということ、私たちは明確に認識すること



が肝要だと考えるものです。

## 六、人間および人間社会にとっての人間の労働の一般的絶対的意義

(一)

人間および人間社会にとって、人間の労働がどんなに重要なものであるかということは、およそ常識をそなえているほどの人であれば、だれでもよく知っているとします。しかし、それがたいへん重要だということを感じとっているだけでしたら、人間および人間社会にとってそれらが本来どういうものであるかということ、また、どうあるべきであるかということをはっきりとらえることはできないのではないか、その場合にはえてして価値概念の欠如した俗流理論のまやかしを見破ることはむずかしく、かえって、その手に乗せられてしまうのが落ち、ということになりかねないのではないかと思われまます。ですから、やはり、人間の労働が、人間および人間社会にとって、どういう意味で決定的意義をもっているものかということの内容を、できるだけ幅広く、また奥深くとらえていることが必要欠くべからざることであるといわなければならないと思います。

この節の表題に「一般的絶対的意義」と記しましたのは、申しあげるまでもなく、およそ人間であり人間社会であるかぎり、すべての人間と人間社会にとって、絶対的に妥当するものだとすることを明示しているものです。食うための生活におわれているため、または金の亡者として利殖に血眼でいるために、人間の労働の絶対的意義に気をつく余裕のある人は、この弱肉強食の資本主義社会にはきわめて少なくなっています。また、マルクスのうちたてた科学的経済理論を学んでいる多くの方がたも、商品生産および資本主義的生産という歴史的に規定された生産関係に結び

ついた特定の経済学的範疇とそれら諸範疇の間の関連の意味内容をとらえることが容易でないため、それに注意を奪われて、右の理論体系の奥には、一般的基砥として人間の労働がかくされていることを認識することが、きわめてむずかしくなっているのが、実情のようです。

これまでの拙い説明によっても明らかにされていると思いますが、科学的な経済理論体系の端初に位置する価値概念は、実に、人間の労働の一般的絶対的意義と結びついたものであり、その意義が商品生産社会において歴史的に現象したものを示したにほかならないとみる事ができると思います。また、そのような結びつきをしっかりとらえてそのうえでその歴史的な特定の現われ方を把握することがきわめて肝要であると考えられます。それは、そのような観点を堅持しているのでなければ、人間社会の歴史的発展過程、いいかえますと、一つの歴史的社會形態からつぎの異なった歴史的社會形態への移行・発展の過程というものは、とうていだしく把握されることはできないからであります。

そこで、つぎにまず、人間にとっての意義から簡単にみてゆくことにしたいと思います。

(一)

人間と他の動物との本質的な違いは、いったい、どこにあるのでしょうか？——この問いは、一寸見ると術学的のようですが、実は、ひじょうに重大な意味をもっているものです。この問いにたいする答え方を見れば、その解答者のもっている経済学的知識の深さがすぐわかってしまうというほどのものなのです。はじめに、マルクスが、この問題にかかわりのある叙述を与えてくれますので、これを引用してみましょう。マルクスは、まず、

「労働は、まず第一に人間と自然とのあいだの一過程である。この過程で人間は自分と自然との物質代謝を自分自

身の行為によって媒介し、規制し、制御するのである。人間は自然素材にたいして彼自身一つの自然力として相對する。彼は、自然素材を、彼自身の生活のために使用されうる形態で獲得するために、彼の肉体にそなわる自然力、腕や脚、頭や手を動かす。人間は、この運動によって自分の外の自然に働きかけてそれを變化させ、そうすることによって同時に自分自身の自然をも變化させる。彼は、彼自身の自然のうちに眠っている潛勢力を發現させ、その諸力の営みを彼自身の統御に従わせる。ここでは、労働の最初の動物的な諸形態は問題にしない。……(中略)……われわれは、ただ人間だけにそなわるものとしての形態にある労働を想定する。くもは、織匠の作業にも似た作業をするし、蜜蜂はその蟻房の構造によって多くの人間の建築師を赤面させる。しかし、もともと、最悪の建築師でさえ最良の蜜蜂にまさっているというのは、建築師は蟻房を築く前にすでに頭のなかで築いているからである。労働過程の終わりには、その始めにすでに労働者の心像のなかには存在していた結果が出てくるのである。労働者は、自然的なもの形態變化をひき起こすだけではない。彼は、自然的なものうちに、同時に彼の目的を實現するのである。その目的は、彼が知っているものであり、法則として彼の行動の仕方を規定するものであって、彼は自分の意志をこれに従わせなければならないのである。そして、これに従わせるということは、ただそれだけの孤立した行為ではない。労働する諸器官の緊張のほかに、注意力として現われる合目的な意志が労働の繼續期間全体にわたって必要である。しかも、それは、労働がそれ自身の内容とその実行の仕方とによって労働者を魅することが少なければ少ないほど、したがって労働者が労働を彼自身の肉体的および精神的諸力の自由な営みとして享樂することが少なければ少ないほど、ますます必要になるのである」(前出、第三卷、邦訳大月版、二三四ページ)。

見られるように、ここには、人間的労働と他の動物の労働との本質的な差違がはっきりと述べられています。その

差違がどこから生じてくるものかということもよく説明されています。要するに、人間的労働は、人間だけがそなえている労働能力、つまり精神的能力と肉体的能力との合目的な支出にほかならないこと、この精神的能力の支出による統一的な合目的支出こそ人間的労働の特質であることがここに示されているのです。

人間は、人間だけがもっている労働能力を流動させることによって、はじめて人間として存続すること、つまりその人間的労働能力の担い手として生存を保つことができるものだということを、私たちはしっかりと銘記しておくことが肝要です。人間だけがそなえているこのかけがえのない貴重な労働能力は、その流動・支出の長い年月にわたる積み重ねによって、はじめて今日のように高度のものに発達することができたものです。<sup>(14)</sup>

(14) エンゲルスは、その有名な労作『猿が人間化するにあたっての労働の役割』（一八七六年）を著わして、そのなかで、まず、

「労働はあらゆる富の源泉である、と経済学者たちは言っている。自然が労働に材料を提供し、労働がこれを富に変えるのであるが、その自然とならんで——労働は富の源泉である。しかしそれだけにとどまらず、労働はなお限りなくそれ以上のものである。労働は人間生活全体の第一の基本条件であり、しかもある意味では、労働が人間そのものをも創造したのだ、と言わなければならないほど基本的な条件なのである」（マルクス『エンゲルス全集、第二〇巻、邦訳大月版、四八二ページ、傍点——山本）

と述べたあと、労働によって「人間の手」がつくりだされ、ついで、「言語」もつくりだされ、「脳、およびそれに隷属している諸感覚、意識と抽象および推理の能力」も発達をとげ、これによって道具を製作することができるようになったことを明らかにしたところで、こう結んでいます。

「手と発声器官と脳との協働——それは各個人においてただけではなく、社会においてもおこなわれた——によって、人間はますます複雑な作業を遂行し、ますます高度の目標を設定してこれを達成するという能力をちかえていった」（前出、四八九ページ）。

労働が人間をつくりだし、その人間的労働が人間をさらに発達させるという一般的絶対的法則が、右のエンゲルスの叙述の中によく示されているといえます。

そもそも、人間とは、なにか？ 人間の本質規定はどういうことか？ と言いますと、私たちは、どうしても、その人間のおかれた歴史的発展段階に応じた高さの精神的能力と肉体的能力をそなえていて、これを適当に流動させることによって、社会の存続にとって必要不可欠の労働をなしとげる者、それが人間である、と答えなければならぬ、と考えられます。ここに「適当に流動させる」と限定をつけましたのは、適当でない場合には、たとえば資本主義社会でたいいていの資本主義的企業の常套手段となつては労働力そのものの破壊がひきおこされますし、その反対に過少労働、つまり不足の流動によつては労働力そのものの萎縮が生ぜざるをえないからです。要するに、人間が人間の名に値するものとして存在し、また社会的人間の名に値するものとして生きているということは、その人間が担っている人間労働力をたえず正常に流動させ、人間的労働を行なうことによつて、社会の存続を支えると同時に、彼自身の担っているその人間労働力そのものを、その不断の流動によつて健全に維持するばかりでなく、さらにこれを高め、発達させているということであり、またそのかぎりにおいて言えることである、と私は考えるものです。

### (三)

人間労働力を担つて人間的労働を行なうかぎりで人間の名に値するものであることが真実であるとしみますと、人間社会についても同じようなことがあてはまると考えなければならぬと思います。つまり、人間社会が人間社会の名に値するものとして存続し、発展することは、ひとえに人間労働力の流動、つまり人間的労働によるものである、と

いうことです。

人間の労働が人間社会にとって一般的絶対的な意義をもっていることを私たちに明示しているものとしては、有名なマルクスのルートヴィヒ・クーゲルマンあての一八六八年七月一日付の手紙があります。これは、たんに人間の労働の意義ばかりでなく、むしろ価値概念の内容を明確に示したものとして重要な意味をもっていますので、いささか長きにすぎうらみはありますが、これをまずつぎに引用してかかげることにしたいと思います。

「……価値概念を証明する必要がある、などというおしゃべりができるのは、問題とされている事柄についても、また科学の方法についても、これ以上はないほど完全に無知だからにほかなりません。どんな国民でも、一年はおろか、二、三週間でも労働を停止しようものなら、くたばってしまうことは、どんな子供でも知っています。どんな子供でも知っているといえば、次のことにしてもそうです。すなわち、それぞれの欲望の量に応じる生産物の量には、社会的総労働のそれぞれ一定の量が必要だ、ということです。社会的労働をこのように一定の割合に配分することの必要性は、社会的生産の確定された形態によってなくなるものではなく、ただその現われ方を変えるだけのことというのも、自明のところですよ。自然法則というのは、総じてなくすることができないものです。歴史的にさまざまな状態のなかで変わりうるものは、それらの法則の貫徹されていく形態だけです。そして社会的労働の連関が個人々の労働生産物の私的交換として自らを妥当させているような社会状態で、この労働の一定の割合での配分が貫徹される形態こそが、これらの生産物の交換価値にはかならないのです。

科学は、まさしく、価値法則がどのよう、貫徹されていくかを展開することのうちに存するのです。だから、最初からこの法則に矛盾するように見える諸現象を「説明」しようとするれば、科学以前の科学を持ち出さなければならな

いことになるでしょう。リカードウの誤りは、まさに、彼が価値について論じている第一章で、展開されなければならないとあらゆる範疇を、与えられたものとして、前提し、これらの法則が価値法則に適合していることを証明しようとしたことにあるのです。

……………(中略)……………

俗流経済学者というのは、現実の、日々の交換関係と価値量とが直接には同一でありえないということに、すこしも気がつかない者のことです。ブルジョア社会というのは、まさに先験的に生産の意識的な社会的規制がまったく行なわれないような社会のことではありませんか。理性的なものや自然必然的なものは、盲目的に作用する平均としてしか貫徹されないのです。俗流経済学者は、内的連関の暴露にたいして、現象面では事態が違うではないかと言いつのって、大発見でもしたような気になるのです。これは実際には、仮象にしがみつき、これこそ究極のものであると言いつのっているのと同じことなのです。それでは、いったい、なんのために科学がいるのです。

しかし、この問題にはもうひとつ別の背景があります。連関が洞察されるとともに、実践上の崩壊に先立って、現存の状態は水遠の必然性をもっているという理論上の信仰はすべてついえ去ります。だから思想の混乱をいつまでも残しておくことこそ、ここでは支配階級の絶対の利益なのです。学問のうえで最後の奥の手と言えば、経済学ではけっして考えたりしてはならないのだ、という言い草しか知らないような、誹謗を生業とするおしゃべりすずめたちを、金を払ってまで養っているのは、それ以外になんのためでしょうか」(マルクス・エンゲルス全集、第三二巻、邦訳大月版、四五四―四五五ページ、傍点―マルクス)。

ごらんのように、ここにはきわめて重要な意味をもった事柄が少なからずふくまれています。そのうちで、当面

の問題にかんするものだけをとりあげて、その内容を確認しておくことにしたいと思います。

まず第一に明示されているのは、およそ人間社会は、どんな歴史的な社会であっても、労働力の担い手によるその人間労働力の流動つまり人間の労働なしにはおよそ存立しえないものだ、ということ です。社会の存立を支える生産および交換にかんする法則を究明すべき科学としての経済学が、このような決定的意義をもつ人間の労働をその理論体系の基礎のうちにはっきりと据えていないということは、とうていありうべからざるところです。マルクスのうちたてた価値概念が、この人間の労働を基礎において、それが私的所有という生産関係のもとで、どのような形態をとって必然的に貫かれるかを明確にしたものであることは、くりかえし申しあげるまでもないところです。この決定的な意義をもつ人間の労働がその視野から消え失せて、ひたすら資本の価値増殖の弁護のための空虚な「理論」をこしらああげているのが、「近代的」という名の俗流経済学であることも、すでにおわかりのことと思います。

第二に、同じくすべての人間社会に妥当する一般的絶対的な自然法則としての、社会が必要とするさまざまな種類の生産物の各一定分量の生産のために、それぞれの生産部門に必要なだけの人間の労働の量が配分されなければならぬという必然性が、明示されています。私的所有にもとづく資本主義社会でも、もちろんこの法則は貫かれなければならないかもしれませんが、明示されています。私利私欲の無計画的な、利潤追求のためのみの生産が支配しているところでは、必要生産物が必要量だけ生産されるということはまったくありえませんが、つねに生産量は必要量の上または下になってしまします。そこで、投下労働量を必要量の生産に必要なだけに事後的に匡正する必要が生じ、これが、交換価値の、価値からの上または下への変動によって、はじめて貫徹されうることとなります。このことは、この論稿の「三」のうち「(5) 価格形態の特質」の項です。本質である価値は必ず交換価値という現象形態を



とって現象しなければならないこと、その交換価値は必ず価値から離れて運動するものであること——このことをマルクスはここで明確にしているのです。交換価値または価格というものは、日々私たちの目の前に現われていて、変動をくりかえしています。この現象をとらえることは誰にでも容易にできますが、この表面に見えている現象形態の奥には価値という本質がひそんでいるということは、ひとり科学的分析によってのみとらえられうるもので、上っ面の現象だけにへばりついている俗物にとっては、このことは逆立ちしても感じとることすらできないところです。

右に引用したマルクスの叙述のうちで、人間的労働の一般的絶対的意義に関連した事柄としては、以上の二つが主なものですが、なおそのほかに、価値概念にかんする重要な指摘がここにふくまれていますので、それについて簡単にふれておきたいと思えます。それは、右の引用のうちの

「科学は、まさに、価値法則がどのように貫徹されていくかを展開することのうちにこそ、あるのです」

というくだりです。価値法則とは、いうまでもなく、商品は、その生産に必要な社会的必要労働時間の量によって規定された大きさの商品価値に應じて、交換されなければならない、もしくは、その価値の大きさに應じてその交換価値がきまる、というものです。ここで私たちがしかと基本にすえておかなければならないのは、さきにあげられた本質としての価値と現象形態としての交換価値ということです。ですから、まず第一に、交換価値が、価値と一致することはむしろ例外であって、一致しないことがふつうだということがよくわかります。つまり、交換価値の絶えない上下への変動を通じて、価値法則が貫徹される、ということでは、個々の商品について、その交換価値または価格は、平均的に見た場合、その商品の生産に必要な社会的必要労働時間、つまり価値量に一致するものとなっているかといえますと、ことはそう簡単には言いきれないものがあります。

さきに本論稿の「二」のなかで引用しましたエンゲルスの叙述の中に出てくる農民と手工業者から成っているような単純な商品生産の場合はもちろんのことですが、資本主義的生産の行なわれる場合にもある一つの生産部門だけとりあげてその範囲内に限って見た場合、生産物・商品の交換価値または価格を理論的に考察しますと、ここでは、交換価値または価格の不断の変動を通じて結局価値通りの交換が行われていることは、明らかであります。ところが、資本主義的生産が發展して一国の主要な生産部門のすべてを支配し、しかも完全な自由競争が行なわれるというような發展段階になりますと、各部門で資本の生産した商品の価格は、そのたえない変動を通じて、その生産に要した社会的必要労働時間、つまりその部門の生産物・商品の個別的な平均価値を実現するものとはならず、その個別的な平均的費用価格プラス平均利潤、つまりいわゆる生産価格に一致するものとなってしまいます。ですから、資本の有機的構成の平均より高度な生産部門での生産価格は、その部門の生産物・商品の社会的平均価値よりも高いものとなり、反対に、資本構成の平均より低い部門の生産価格はその社会的平均価値よりも低いものとなってしまい、それぞれ各個別的生産部門内部では平均的に見た場合、その価格・交換価値は、社会的平均価値に一致することはないか、それになります。そのために、このような段階では価値法則は貫徹しえなくなるのではないか、マルクスの価値理論は、このような高度に發達した自由競争の支配する資本主義發展段階にいたって挫折の運命におちいるのではないか、と思われれます。

しかし、右のように判断するのはやはり浅慮のそしりを免がれることはできないものです。と申しますのは、なるほど個々の生産部門そのものの内部についてみれば、価格の変動の中心である生産価格は、その部門の社会的平均価値量からずれて、その上または下にありますが、これらの生産部門全部について観察しますと、それぞれ社会的平

均価値から上または下にあつてプラスまたはマイナスの偏差をもつ各生産価格は、それらの総計においては、プラスとマイナスは相殺されることになり、総生産価格は社会的平均価値の総計と一致することになるのです。つまり、このような資本主義的生産の発展段階においては総生産価格は総価値に一致するという形で、価値法則は、やはりりっぱに貫徹するものとなっているのです。

右にみましたように、価値法則がどのような現象形態をとつて現実に貫徹されるかということとは、商品生産、したがつて資本主義的生産の発展段階に依つて、それぞれその形態を異にせざるをえないものとなっていますし、このようにその貫徹様式の発展を、資本主義的生産の発展の内容と結びつけて、ただしく解明しつくすところにこそ、科学の本領が在るので、マルクスは教示しているわけです。マルクスが、

「価値法則がど、の、よ、う、に、貫、徹、さ、れ、て、い、く、か、を、展、開、す、る」

と述べていますこの「展開する」とは、原語では *entwickeln* という言葉で示されているもので、それは、その現象する形態を未発展のものから発展したもので、歴史的・論理的にただしく展開してゆくということなのです。<sup>(15)</sup>

(15) マルクス・エンゲルス全集、第三三卷、邦訳大月版では、ここの箇所を、

「価値法則がど、の、よ、う、に、貫、徹、さ、れ、て、い、く、か、を、逐、一、明、か、に、す、る、こ、と」(ゴシック体—山本)

と訳出しています。しかし「逐一」ということは、ただ、「一つ一つ順を追つていちいち詳しく」ということであつて、簡単な形態から論理的に正しく規定を加えていってほしいにより複雑な、より高度な形態への発展を明らかにするという、いわば弁証法的な展開を意味するものという、原語の肝心な意義が見失われてしまう恐れが多分にあるのではないかと私は考えます。マルクスがリカードゥを批判して、もっとも発展した生産価格の法則をば、その著『経済学および課税の原理』の最初の価値を取り扱っている第一章にすぐそのままではめて論じているという、まったく誤った取り扱いを指摘しているのも、リカードゥが「展開する」という弁証法的方法を採らなかつたからなのです。

ところで、マルクスは、右に見ましたように、「俗流経済学者」を指して、

「現実の、日々の交換価値と価値量とが直接には、同一でありえない、ということに、すこしも気がつかない者のこと  
です」

と、きびしく批判していますが、残念ながら、この「俗流経済学者」という規定は、自分では「マルクス経済学者」だと思いこんでおりまた他人からも真正正銘の「マルクス経済学者」だとみなされている学者先生がたのかなり多くのかたがたにも、そのままではまるものだということを、このさい、指摘しておかなければなりません。と申しますのは、これらの先生がたは、価値法則とは価格が価値と一致すること、つまり右のマルクスの言葉をそのままかきますと、「日々の交換関係と価値量とが直接同一である」ことだという主張をかたく堅持されて、価格が価値から離ればそれは価値法則の侵害だ、価値法則の阻害または攪乱だとしきりに主張しておいでだからです。簡単に侵害されたり攪乱されたりするようなへっぽこな「法則」を「価値法則」だとするのもまことに奇妙な法則観ですが、一皮剥ぎますと、右のような価値法則についての主張が、奇しくも、マルクスによって摘発された俗流経済学者のそれとまったく同じように、「仮象にしがみついて、これこそ究極のもの、法則である」と言いつのっている、という実態がそこに現出することになっています。マルクスの批判したのは、ブルジョア的な俗流経済学者ですが、今日発達した資本主義国に輩出したのは「マルクス主義的」な俗流経済学者である、というわけ<sup>16</sup>です。なお、社会主義社会にも価値法則があるという、超錯乱型俗流経済学者の輩出については、つぎの「七」でとりあげてみることにしたいと思います。

(16) マルクスの文章について、その豊富・厳密な内容を刻苦して正確にとらえることを心掛けず、上っ面の皮相な解釈で事足

れりとしていらっしやるような自称「マルクス経済学者」の先生がたも、やはり「マルクス主義的」な俗流経済学者の部類に入れるのが適当と思われれます。たとえば、さきに引用しましたマルクスのクーゲルマンあての手紙の中の「各生産部門へ一定の割合で労働を配分する必要性」という言葉を讀んで、この個所をば、ずっとあとから出てくる「価値法則」という文字にすぐ直結させて、たちまちのうちにつぎのような驚嘆に値する「主張」をこしらえあげてしまう「マルクス経済学者」は、この国には少なからず見られます。——曰く、「各生産部門への総労働の配分を決定する法則——これこそがマルクスの言っている価値法則である」と。

必要な生産物が必要な量だけ生産されなければ人間社会は存続することができないからこそ、どんな社会でも総労働を必要に応じて一定の割合で各生産部門に配分することが絶対に必要であるわけで、それだからこそ、マルクスは、この労働配分の必要性は、どんな子供でも知っている、すべての社会に妥当する超歴史的な社会的自然法則であると、丁寧に説明しているのです。この超歴史的な社会的自然法則をとらえてそれこそが価値法則であるなどという「主張」をこしらえあげるためには、いったい、どのような超弁証法的思考が必要なのでしょう。しかも、マルクスは、右の説明にすぐひきつづいて、この超歴史的な社会的自然法則が「貫徹される形態」こそ、まさしく交換価値であると明示してくれているではありませんか。この明白な文字も、超弁証法的思考にかかると、まるっきり見えないものになってしまうのでしょうか？

ところが、右のような「マルクス主義的」俗流経済学者は、マルクス・レーニン主義を基本準則とするといわれる「社会主義」諸国には掃いて捨てるほどあまたいられる模様で、その中の指導的大幹部と称される御仁は、価値法則の意味を説明して、「それは、一つには、価値が価格と一致するという法則であり、二つには、総労働の配分を決定する法則である」と教示していられるようです。このような主張は、まことに申し分のない超弁証法的俗物思考による「ごった煮」のみごとなお手本としか言いようのないものです。いったい、「価値と価格との一致の法則」と「労働配分決定の法則」とは、どういう関連があるのでしょうか？ 私は、石のような「権威的」な「ごった煮」式解釈がまかりとおっているのを見るにつけ、昔から言い伝えられたつぎの古いことわざを頼りとする手合がいかに多いかとしみじみ感心させられないではありません。——「下手な鉄砲打ちも、数打ちゃ当る」。

## 七、社会主義社会における価値生産の全面的廃案

(一)

労働生産物が商品という独特の社会的形態をとるのは、そして、労働生産物の生産に支出された抽象的人間的労働が当の労働者に対立して、商品そのものの価値として自立化するのは、ただ歴史的に限られた社会的生産関係のもとにおいてだけ、つまり、生産手段の私的所有という生産関係のもとでだけであるということは、争う余地のない明白な法則でありますし、理論的に論証され、また歴史的にも実証されているところです。この法則は、なぜ労働生産物が商品として独立化して人間を支配する独自の社会的力、つまり価値となるかという根拠を論理的に厳密・正確に追究することによっても、明白なものとなるはずで、このことは、マルクスによってうちたてられた科学的な経済学を学んでいるほどの人間にとつては、いささかも異論をさしはさむ余地のないところであります。ところが、ここ二、三十年來にわかにこれに異論を唱える「マルクス経済学者」が簇生するという異常な事態が見られるようになりましたので、やはり、右の法則を、マルクス・エンゲルスの争う余地のない教示に照らして、はっきりと確認しておくことが緊要であると、私は考えます。

そこで、まず、商品・価値が存在するのは私的所有の社会だけであって、社会主義社会にはそれらが存在する余地は全くありえないという根本法則を明示している基本的文献から必要な引用をかかげることにしたいと思います。

『資本論』からの抜粋。

①「ただ、独立に行なわれていて互いに依存しあっていない私的労働の生産物だけが、互いに商品として相對する

のである」(前出、第三卷、邦訳大月版、五七ページ、傍点―山本)

②「最後に、気分を変えるために、共同の生産手段で労働し自分たちのたくさんの個人的労働力を自分で意識して一つの社会的労働力として支出する自由な人々の結合体を考えてみよう。ここでは、ロビンソンの労働のすべての規定が再現するのであるが、ただし、個人的にはなく社会的に、である。ロビンソンのすべての生産物は、ただ彼ひとり個人的生産物だったし、したがって直接に彼のための使用対象であった。この結合体の総生産物は、一つの社会的生産物である。この生産物の一部分は再び生産手段として役立つ。それは相変わらず社会的である。しかし、もう一つの部分は結合体成員によって生活手段として消費される。したがって、それは彼らのあいだに分配されなければならない。この分配の仕方は、社会的生産有機体そのものの特殊な種類と、これに対応する生産者たちの歴史的発展とにつれて、変化するであろう。ただ商品生産と対比してみるために、ここでは、各生産者の手にはいる生活手段の分け前は各自の労働時間によって規定されているものと前提しよう。そうすれば、労働時間は二重の役割を演ずることになるであろう。労働時間の社会的に計画的な配分は、いろいろな欲望にたいするいろいろな労働機能の正しい割合を規制する。他面では、労働時間は、同時に、共同労働への生産者の個人的参加の尺度として役立ち、したがってまた共同生産物中の個人的に消費される部分における生産者の個人的な分け前の尺度として役立つ。人々が彼らの労働や労働生産物にたいしてもつ社会的関係は、ここでは生産においても分配においてもやはり透明で単純である」(前出、第三卷、邦訳大月版、一〇五ページ)。

マルクス『ゴータ綱領批判』からの抜粋。

③「生産手段の共有を土台とする協同組合的社会的内部では、生産者はその生産物を交換しない。同様にここで

は、生産物に支出された労働がこの生産物の価値として、すなわちその生産物にそなわった物的特性として現われることもない。なぜなら、いまでは資本主義社会とはちがって、個々の労働は、もはや間接にはなく直接に総労働の構成部分として存在しているからである。……（中略）……

ここで問題にしているのは、それ自身の土台の上に発展した共産主義社会ではなくて、反対にいまようやく資本主義社会から生まれ、たばかりの共産主義社会である。したがって、この共産主義社会は、あらゆる点で、経済的にも道徳的にも精神的にも、その共産主義社会が生まれでてきた母胎たる旧社会の母斑をまだ帯びている。したがって、個々の生産者は、彼が社会に与えたのと正確に同じだけのものを——控除したうえで——返してもらおう。個々の生産者が社会に与えたものは、彼の個人的労働量である。たとえば、社会的労働日は個人的労働時間の総和から成り、個々の生産者の個人的労働時間は、社会的労働日の中の彼の給付部分、すなわち社会的労働日の中の彼の持分である。個々の生産者はこれこれの労働（共同の元本のための労働分を控除したうえで）を結付したという証明書を社会から受け取り、この証明書をもって消費手段の社会的貯蔵のうちから等しい量の労働が費やされた消費手段を引きだす。個々の生産者は自分が一つのかたちで社会に与えたのと同じ労働量を別のかたちで返してもらおうのである」（前出、第一九巻、邦訳大月版、一九二〇ページ、傍点—マルクス、ゴシック体—山本）。

エンゲルス『反デューリング論』からの抜粋。

④「……ある商品がこれこれの特定の価値をもっていると私が言うとき、私は次のことを言っていることになる。（一）それが社会的に有用な生産物であること。（二）私人が私的な勘定で生産したものであること、（三）私的労働の生産物でありながら、同時にいわば知らず知らずのうちに、望みもしないのに、社会的労働の生産物でもあるこ



と、しかも、社会的な仕方、すなわち交換を通じて確かめられた一定量の社会的労働の生産物であること、(四)私はこの量を労働そのもので、すなわちあれこれの労働時間数で言いあらわさないで、他の一商品で言いあらわすということ、これである。だから、私がこの時計はこの反物と等しい価値をもっており、そのどちらも五〇マルクに値する、と言うとき、私は、時計と反物と貨幣とは等しい量の社会的労働がふくまれている、と言っていることになる。つまり、私は、これらのものにあらわされている社会的労働時間が社会的に測られて等しいものと認められたことを、確認しているのである。だが、それは、普通に労働時間を測るときのように、直接に、絶対的に、労働時間数または日数等で測られたわけではなく、回り道をして、交換を媒介として、相対的に測られたのである。したがってまた私は、この確かめられた労働時間の量を労働時間数で言いあらわすことはできない。労働時間数は、私には相変わらずわかつていないのである。そうではなく、やはり回り道をして、相対的に、等しい量の社会的労働時間をあらわす他の一商品で、それを言いあらわすよりほかはない。すなわち、時計は反物と等しい価値をもっている、と」

(前出、第二〇巻、邦訳大月版、三一六ページ、傍点―エンゲルス。)

⑤ 「社会が生産手段を掌握し、生産のために直接に社会的に結合して、その生産手段を使用するようになったときから、各人の労働は、その特殊な有用性がどんなにさまざまであっても、はじめから直接に社会的な労働となる。そうなれば、ある生産物にふくまれる社会的労働の量を、まず回り道をして確かめるには及ばない。平均的にどれだけの社会的労働が必要かということは、日々の経験が直接に示してくれる。蒸気機関一台、最近の収穫期の小麦一ヘクタリットル、一定品質の布一〇〇平方メートルに、どれだけの労働時間がふくまれているかを、社会は簡単に計算することができる。だから、そのときになれば生産物に投入された労働量が社会には直接にまたは絶対的にわかつてい

るのに、その後も相変わらず、以前には便法としてやむをえなかった、たんなる相対的な、動搖的な、不十分な尺度で、すなわち第三の生産物でそれを表現し、その自然的な、十全な、絶対的尺度である時間、で表現しないなどということは、社会にとって思いもよらないところである。……（中略）……したがって、右のような前提のもとでは、社会は生産物にどんな価値も付与しない。社会は、一〇〇平方メートルの布の生産に、たとえば一〇〇〇時間を要したという簡単な事実を、この布は一〇〇〇労働時間の価値をもつなどという、的はずれの、無意味な仕方では表現することはないのである。もちろん、そうであっても、社会は、それぞれの使用対象の生産にどれだけの労働が必要かということを知っていなければならないであろう。社会は、生産手段——これにはとくに労働力もはいる——においてその生産計画を立てなければならないであろう。結局は、種々の使用対象の効用が、——それらをたがいに比較秤量し、またそれらの生産に必要な労働量とも比較秤量したうえで——生産計画を決定するのである。人々は、高名な「価値」の仲だちによらないでも、万事をしごく簡単にやっつけていくであろう」（前出、第二〇巻、邦訳大月版、三二八—三一九ページ、傍点—エンゲルス）。

⑥ 「価値概念は、商品生産の経済的諸条件の最も一般的な、したがって最も包括的な表現である。したがって、価値概念のうちには、たんに貨幣の萌芽ばかりでなく、商品生産と商品交換とのあらゆるより発展した諸形態の萌芽もふくまれている。価値が私的生産物にふくまれている社会的労働の表現であるということのうちには、すでに、この社会的労働と、その同じ生産物にふくまれている私的労働とのあいだに差異が生じる可能性がふくまれている。だから、ある私的生産者が、社会的な生産様式が進歩してゆくのに、これまでどおりの仕方では生産をつづけてゆくなら、彼はこの差異を身にこたえて感じるようになるのである。一定の種類の商品の私的生産者の総体が、社会的需要を超

過する数量でその商品を生産すると、すぐさまこれと同じことが起こる。ある商品の価値が他の一商品でしか表現できず、またそれとの交換においてしか実現できないといううちには、交換が成り立たなかったり、でないまでも、とにかく本来の価値を実現しなかつたりする可能性がふくまれている。最後に、労働力という特殊な商品が市場に現われてくると、この商品の価値も、他のあらゆる商品の価値と同じように、その生産のために社会的に必要な時間によって規定される。だから、生産物の価値形態のうちには、資本主義的生産形態全体、資本家と賃銀労働者との対立、産業予備軍、恐慌が、すでに萌芽としてひそんでいるのである。だから、「真の価値」をつくりだすことによって、資本主義的生産形態を廃止しようとするのは、「真の」教皇をつくりだすことによってカトリック教会を廃止しようとするようなものである。それは、生産者が自分自身の生産物に隷属させられていることの最も包括的な表現である一つの経済的カテゴリーを徹底的に貫徹させることによって、生産者たちが自由に自分たちの生産物を支配するようになる社会をつくりだそうとするものである」(前出、第二〇巻、邦訳大月版、三一九ページ)。

⑦ 「『平等な評価の原則にもとづいて労働が労働と交換される』——およそこの言葉に意味があるかぎりで——ということ、つまり等しい社会的労働の生産物が相互に交換可能であること、つまり価値法則は、ほかならぬ商品生産の基本原則であり、したがってまた商品生産の最高の形態である資本主義的生産の基本法則でもある。今日の社会では、この基本法則は、およそ私的生産者の社会で諸法則が自己を貫徹できる唯一の仕方で、自己を貫徹する。すなわち、物や関係のうちにはひそみ、生産者たちの意志や行動から独立した、盲目的に作用する自然法則として、自己を貫徹するのである。デューリング氏は、この法則を彼のコミュニンの基本法則に高め、経済コミュニンは十分に意識してこの法則を実施すべきだ、と要求するのであるから、彼は現存の社会の基本法則を彼の空想社会の基本法則にする

わけである。(17) 彼は、現存の社会を欲していないがら、ただその弊害をなくしたいのである。この場合、彼はブルードンと全く同じ基盤の上で行動している。ブルードンと同じように、彼は、商品生産が資本主義的生産に発展したことから生じた弊害をとりのぞこうと望んで、それらの弊害に対抗して商品生産の基本法則の作用を発揮させるという手段にたよるのである。これらの弊害を生み出したのは、まさにこの法則のはたらきであったのだ。ブルードンと同じように、彼は、価値法則の空想上の帰結にたよって、その現実の帰結を廃止しようとする」(前出、第二〇巻、邦訳大月版、三二一—三二二ページ)。

(17) この文章は、スターリンが、かつて一世を風靡した彼の著作『ソ連邦における社会主義の経済的諸問題』の中で力説強調した「主張」、つまり、「社会主義社会にも価値があり価値法則があるのは当然である。われわれは価値法則を利用すべきである」という、「画期的」な「主張」を想起させないではおかないものです。右のエンゲルスのまことに皮肉な文章はそっくりそのまま彼スターリンの「主張」にあてはまるものです。——「彼スターリンは、資本主義社会の基本法則である価値法則を、彼の『社会主義社会』の基本法則にするのである」!

ごらんのように、マルクスもエンゲルスも、このうえなく明確に、生産手段の私的所有の存在しない社会主義社会、つまり共産主義社会の第一段階においては、商品も価値もまったく介在する余地のないものだということを述べています。商品も価値も存在しないところに価値法則などという、奇妙な「法則」だけがひとり存在するすべもないことも自明のところでは、こうしたことは、マルクス主義の立場からすれば、当然すぎるくらい当然のことです。以上引用しましたところによって、事理はまことに明白であると申せますが、なお念のため、私は、同じ趣旨のことを別の側面から説明してみたいと思います。

さきの『ゴータ綱領批判』からの引用(③)のなかで明瞭に示されているように、共產主義社会の第一段階のきわだった特徴は、各成員個人が社会に提供した労働の量が計算され、その労働量に応じて——必要な控除をして——直接に、社会の保有する消費手段貯蔵の中からそれだけの労働量の対象化した消費手段の分配をしようというところにあります。私的所有にもとづく資本主義社会では、各私的生産者の私的労働は、その抽象的人間的労働の面においてみたととき、その質はきわめて種々様々、千差万別であって、各私的生産者の私的個別的労働を同じ質のものとして量的比較をすることなど、とうてい不可能であることは、いままら申しあげるまでもないところです。また、それであるからこそ、エンゲルスがよく説明してくれているように、その労働量は、直接的にはなく、間接的に、相対的に、第三の商品をもって表現せざるをえないことにもなっているのです。

では、社会主義社会では、なぜ直接に、同じ質のものとして、その労働量が労働時間をもって計算されるのでしょうか？ それはまず第一に、この社会の各成員の担っている人間労働力は、資本主義社会の私的生産者のそれとは比べものにならないほど高度に発達したもので、各成員は、同じ水準の高さの、調和のとれた精神的能力と肉体的能力との担い手となっているからです。第二には、この社会では、資本主義社会のように個別的・私的生産、つまり個々別々の労働力の流動はまったく存在する余地もなく、すべての成員は、ほかの多数の成員との共同労働、つまり協業においてその高い労働力を流動させているからで、そのために、どの成員の労働も、同等な質の労働として実現されているために、直接にその労働量を労働時間で測ることができることになっているからです。

右の二つの条件がなければ、各成員の個人的労働量を直接に労働時間で測ることは、とうていできません。しか

し、この二つの条件が実現するまでに、社会および各成員は、どれだけ長期にわたる努力と刻苦奮闘を必要とするかとでしょうか？ 社会主義革命によって国家権力を掌握し資本家階級から生産手段を収奪して社会的所有とし、労働者階級が国家権力を握って計画経済を推しすすめるとしても、広範な農民階級、手工業者、商人、等々が残っており、商品生産の残存物も濃厚に残っているようなところで、いったい、どうして各成員の労働量を計算することができるのでしょうか？

すべての成員がひとしく同じ労働者と成り、しかも高い水準の精神的能力と肉体的能力の担い手として、一人残らず大規模な社会的共同労働に積極的に参加するものと成るには、いったい、どれだけの労苦と時間が必要だと考えたらよいのでしょうか？ どんなに少なく見積っても、おそらく一世紀ではとうてい足りないでしょうし、すくなくとも、二、三世紀は要しましょう。一つの歴史的社會が、すっかり変革されて、つぎのより高い歴史的社會に移行・発展するために、人類は、これまで、いつでもまず二、三世紀は要したものだということを考えますと、右の推量も、あなたが誇張にすぎるものとはいえないのではないのでしょうか。

いずれにしても、右のような資本主義社會よりはるかに高度に発達した社会主義社會において、商品や価値などが介在する余地のないことはまったく明瞭ですし、マルクス・エンゲルスも、そしてレーニンもこのことをくりかえし明示しているのは、理の当然です。およそマルクス主義理論を建前とする論者で、このことを否定したり、これに異論を唱えたりする者がありようはずもないのは、わかりきったこと<sup>(18)</sup>です。

(18) しかし、世間は広いとはよく言ったもので、『資本論』の理體系をただしく理解することには一向に努力せず、ひたすら、社会主義社會にも価値が存在するということを裏書きしているマルクスの文章を探し出すことばかりに熱をいれる人間も

出てきます。この御仁が、苦心の末探しあてたのは、たった一つ、つぎの個所です。

「……資本主義的生産様式が解消した後にも、社会的生産が保持されるかぎり、価値規定は、労働時間の規制やいろいろな生産群のあいだへの社会的労働の配分、最後にそれに関する簿記が以前よりもいっそう重要になるといふ意味で、やはり肝要である」(前出、第二五卷、邦訳大月版、一〇九〇ページ)

右の探究者は、ここに出てくる「価値規定」という文字を発見して、これを「価値」または「価値法則」と同じものと早やのみこみされたのでしようが、「価値規定」という言葉の意味を考える力も余裕もおおかつたようです。

「価値規定」とは、価値の大きさの規定のことで、丁寧に言いますと、「価値の大きさは、一商品を生産するのに必要な社会的平均的な質の労働の量、または社会的必要労働時間によって規定される」ということです。「資本主義的生産様式が解消したあと」に来るのは、真に人間社会の名に値する、人間が主人公となる共産主義社会にほかならないことは言うまでもありません。そこでは、各成員の労働は同等の高い質のもの、つまり社会的平均的労働として支出されなければならず、そのかぎりで、「労働時間の規制」も「いろいろな生産群のあいだへの社会的労働の配分」も、「それにかんする簿記」も、必要なものとして実施されうるし、また実施されなければならないものとなっています。

つまり、資本主義社会では、商品価値の量が「社会的平均的質の労働、または社会的必要労働時間」によって規定されるのにたいして、共産主義社会では、同じ「社会的平均的質の労働、または社会的必要労働時間」によって社会的生産物の生産に要する労働量が直接に規定されるのだということを説明するために、マルクスは、ことさら「価値規定」という言葉を用いたものと考えるのが至当なのです。「価値規定」という形式がそのまま妥当するというのではなく、「価値規定」の内容にあたるもの、つまり「社会的平均的質の労働の量による規定」そのものが、やはり肝要である (Fessenden) と述べているのです。これを「価値規定」の形式にかんすることと解して共産主義社会にも「価値」が存在するとマルクスがここで述べているのだと解釈することは、つまり、マルクスは第一巻では共産主義社会には商品も価値も存在しえないとの主張をかけた、この第三巻では共産主義社会にも価値が存在するとの主張をかけたということ、つまりマルクスが前言と全く矛盾する主張をかけたというのだと理解することになるわけで、残念ながら、正常な論理的思考の限界を超える見方としか言いようのないものです。

## (三)

私的所有の完全に廃棄された社会主義社会には商品も価値も存在する余地すら存しないという真理は、マルクス・レーニン主義理論の基本であり、精髓ともいべきものです。十月社会主義革命に勝利してソヴェト政権をうちたてたレーニンは、「ソヴェト・ロシアを社会主義と言うのは、それが社会主義社会を目標にしており、それに到達すべきものだとすることを明示するためのものである。しかし、資本主義の残存物はあまりにも深く広いものがあって、解決困難な問題が山積している。ロシアのように後れた国では革命をやりとげることは比較的容易であったが、共產主義社会の第一段階に到達することはもっとも困難であり、きわめて長期にわたる闘争が必要不可欠であることを真剣に考慮しなければならない」と、くりかえし教訓したものです。しかし、不肖の後継者スターリンは、強力的な法によって農民の九四パーセントをコルホーズに組み入れるや、一九三六年にはソヴェトは早くも社会主義社会に成ったと宣言し、一九五二年の著作『ソ連邦における社会主義の経済的諸問題』では、「共產主義社会の第一段階にあるソ連に商品、価値があるのは当然で、われわれは、価値法則を利用すべきである」と公言したものです。このいわゆる「スターリン論文」の公表にたいして、日本をはじめ世界中のほとんどすべての共産党・労働者党から一人ひとりの自称「マルクス主義者」にいたるまで、どんなに熱狂的に絶讃し、歓呼して担ぎまわったことでしょうか。マルクス・レーニン主義理論の基本を真っ向から改ざんし、これに背反するまぎれもないこの俗物的「理論」を糺弾してこれに徹底的批判を加えるなどということは、残念ながら今日にいたるまでほとんど見られず、かつての絶讃・崇拜者たちは、まさしく盗人がその盗みを働いた場所を避けて通るように、これに手をふれることもなく、相も変わらぬ、「自己批判」を売り物にしながら、マルクスの『資本論』やその他の重要文献は自分たちの一手専売であるか



のような宣伝にけんめいの体です。これらの連中の無理論・無節操は毎度のことで驚くに当りませんが、ソ連の強力な影響下にある東南欧の「社会主義」諸国において、「自分たちの国は社会主義国であり、商品も価値もあるのが当然」といった驚くべき「理論」がすべての「公認」の経済学教科書の中に大書されているのを見たり、また、これらの国の経済学者や教授先生たちの熱心に読むのは、ブルジョアの俗流経済学の文献ばかりで、マルクス『資本論』は書棚で埃を被っている有様だとの話を耳にしますと、歴史の前に人間がどんなに無力なものであるかということを感じさせられずにはいません。マルクスが『ゴータ綱領批判』の中で懇々と論しているように、資本主義社会の「経済的、道徳的および精神的」母斑のなんと強力で、永続的なものであることでしょうか！

資本家・地主の支配権力をうち倒して労働者・農民を主とする勤労人民大衆の国家権力をうちたて、いっさいの生産手段を社会的所有に強力的に移すという社会主義革命が首尾よく勝利を収めるまで、どんなに多くの克服困難な問題と数えきれないほどの労苦と犠牲が必要であったかということも、またそれだけに、資本家・地主の権力を打倒して働く者の支配する体制をうちたてた画期的な輝かしい成果のほども、私たちはよくよく肝に銘じて理解することが大切です。そこでは、資本家・地主はみごとに打ち倒されて働く者がはじめて主人公になったのですから、「資本主義社会はすっかり変革されて、そこにあるのは新しい社会主義社会だ」と考えるのは、まことに無理からぬものがあります。しかし、ここにこそ、危険な陥穽のあることを、私たちはよくよく考慮することが絶対に肝要なのです。

国家権力を掌握し社会的生産手段を社会的所有に移したのは、共産主義社会をこれからうちたてるための基礎的條件をととのえたにすぎないのです。すべての労働力の担い手を同じ労働者として大規模な社会的生産組織に組み入れ先進的資本主義国のそれよりも高い生産力を実現する機械的生産と社会的・計画的な分配とをすべての労働者そのひ

との手で達成することできたとき、そのときはじめて、そこに共産主義社会の第一段階である真実の社会主義社会がうちたてられたと言えるのです。しかし、そこに到達するまでには、社会主義革命の達成にくらべて、それよりはるかに複雑で克服困難な問題が山積しており、しかもはるかに長期にわたる、粘りづよい、根気を要する闘争の数々が待ち構えていることを知らなければなりません。

共産主義社会の第一段階に到達するまでの、いわゆる過渡期をうめつくしている重大なかつ大きな諸困難と闘争課題を明確に認識していたからこそ、マルクスはその『ゴータ綱領批判』の中で、ことさら、

「資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者から後者への革命的転化の時期がある。この時期に照応してまた政治上の過渡期がある。この時期の国家は、プロレタリアートの革命的独裁以外のなものでもありえない」  
（前出、第一九巻、邦訳大月版、二八―二九ページ、傍点―マルクス、ゴシック体―山本）

と説明して、「革命的転化」の重大な意義に注意を促しているのです。本当に困難で真剣な闘いは、まさに資本主義の強力な「経済的、道徳的および精神的」母斑を完全に掃滅すべき過渡期にこそ、遂行されなければならないのです。すぐれたマルクス主義者レーニンは、理論的にも、また苛烈な実践を通じても、このことをよく理解していたからこそ、「われわれは、社会主義社会に向って、やっと一步を踏み出したばかりのところだ」とくりかえし論じたものです。

社会主義革命に勝利して労働権力をうちたてた国家は、世界史の見地からすれば、資本主義社会から離脱して共産主義社会の時期に移行したものと言うべきですが、しかし、厳密に、その社会経済体制そのものの内容についていえば、共産主義社会に向って一步を踏み出した一つの過渡期社会にほかならないことは争う余地のないところです。こ

れを共産主義社会の第一段階を達成した社会主義社会などと規定することは、まったくの虚構であり、無理論の妄想としか言いようのないものです。

「社会主義」諸国に商品や貨幣があるということ自体、資本主義社会の「経済的」母斑がいかに根強く、強力であるかを如実に示しているものです。個人主義・利己主義などの「道德的、精神的」母斑の「健在」にいたっては、いうまでもないところです。生産力水準も一般生活水準も資本主義諸国より低劣である上に、資本主義社会に劣らない社会的腐敗現象やさまざまな特権支配が跡をたたないという「社会主義」諸国の実情に接したとき、困苦欠乏にたえて犠牲を惜しまず世界革命運動に挺身しつつある数えきれないほど多くの被抑圧・被搾取人民大衆の胸のうちには、はたして、どんな感慨が往来することでしょうか？

これらの「社会主義」諸国はいずれも社会主義社会に向っての第一歩を踏み出したばかりの過渡期社会であって、資本主義の「経済的、道德的、精神的」母斑がまだきわめて強力に残存していて、そのために資本主義への変質の可能性が濃厚に現存すること、商品や貨幣の存在はまさしくその一つの現われにはかならないことを明確に認識して、むしろ商品、貨幣の清算の方向に向って社会的生産組織の整備・拡充を強力に推進すること——これこそが、社会主義社会の名に値する共産主義社会へ近づく唯一の確實な道ではないか、と私は考えます。「社会主義」という名にとられてその実を明確に認識することができない俗物にとっては、「実、事、求、是」という折角の金文字もただの飾り物になってしまうことでしょう。

## 簡単な要約

もはや紙数も予定を超過しましたので、ここでは、本文を要約するかわりに、この拙い論稿のなかで、私がとくに大切だと考えています一点だけを、ここで指摘しておくことにとどめたいと思います。それは、「三」の中で挙げました「価値の人間支配」と「貨幣の全能」ということです。マルクスは、『資本論』第一巻第一章第四節を「商品の物神的性格とその秘密」と題して商品が人間を支配する社会的力をもつことを「物神 (der Fetisch) としてよく説明していますし、また、その第二章「交換過程」の末尾には、「貨幣物神」という言葉をかかげて、読者の注意を促しています。しかし、この第一章第四節と第二章のあとでは「物神」という文字も出て来ませんので、資本の説明に移るころには、えてしてその印象が薄れがちです。しかし、私は、商品・価値、貨幣、資本の「物神」、つまり完全な人間支配は、理論体系の中でも、実生活の中でも、きわめて強力な意義と影響力をもっていて、このことを終始念頭においていることが、なによりも緊切だと考えるものです。これを基本にすえてこそ、資本主義の革命的揚棄をめざしてのたゆまぬ理論的研鑽と実践的奮闘の持続のための活力も生まれてくるのではないかと、私は愚考するものです。

さらにいまひとつ、商品・価値と貨幣の「物神」は、いま「社会主義」国と称されているすべての国々で強力にその力を発揮しつつあるもので、ここに、マルクスのうちたてた科学的経済理論の真価を認めなければならぬ、ということを指摘しておきたいと思えます。かのシャルル・ペトレームがその労作『ソ連における階級闘争』の第三巻第二部「支配される者」（一九八二年刊）の巻頭の「第三巻を読むにあたっての注意書き」のなかで、現在のソ連をひとつの「特殊な資本主義」と誤って規定しているのは、この「貨幣物神」の強力な作用を過大に評価したためといえる

のではないかと、私は考えています」(拙著『社会主義への道—その理論と現実—』、青木書店刊、二一四—二二〇ページ参照)。

## あとがき

この拙い論稿を綴りながら、痛感させられますのは、いつものことですが、科学的な理論の把握にとつては、正確な論理的思考と論理一貫性がなによりも不可欠な要件だということです。たとえば、商品の価値性格はその特殊な社会的形態であつて、その自然的な物的形態とはいささかもかわりはないのに、商品の物的効用から価格をひきだすという俗流「経済理論」の論法は、まさに疝氣の筋違いというものです。と申しましても、具体的労働と抽象的労働との二面の統一としての人間の労働がわからず、抽象的労働があるのは資本主義社会だけだという、括弧つき「マルクス経済学者」の「主張」も、右に劣らず、美事な錯乱的思考をさらけだしたものです。この種の錯乱的思考は、まことにキ、テ、レ、ツ、な迷語、迷文句をつぎからつぎへと生みだすもので、枚挙にいとまがないほどです。ちよつとした「学問的」用語にすぐさま「論」をくつつけて、さももつともらしい「学術的」タワゴトを生産するのは、漢字と官字とが優勢なこの国の著しい現象というものでしょうか。たとえば、「原理論」とか「段階論」とかいう理論があると宣伝している向きも少なくないようですが、これらの言葉を外国語に訳したら、なんとという文字になるでしょう? 「論」の訳語は、私がかねてから使用者たちにお願ひしているのですが、いまだお答えもありません。使つておいでのです。「流通形態」などという迷語にいたつては、まさに世紀的なタワゴトの随一といふべきものです。とくに偉そうに聞えるのは「経営学」という迷語です。資本主義社会での経営とか企業とかいうものは、もちろん、資本が賃銀労働者から最大限の剰余価値を搾取し実現するためのものだけではありませんから、術学的表現など問

題にしない先進資本主義諸国では、「経営」にかんする技術や大学の講座は、すべて簡單明瞭かつ率直に Management または Accounting という正確な用語だけで示されています。ところが、驚いたことに、この日本では「科学として経営学」などという迷文句までふりまわす自称「科学的社会主義」的教授先生まで現出する有様です。この先生は「科学」という大切な用語の意味はまったくわけわからずにつかっただけですが、いったい、最大限の剰余価値搾取の技術について、どんな客観的法則を明らかにした理論体系が出来あがるのでしょうか？ 『資本論』第一巻第一一章「協業」の中で見つけた「協業における指揮・監督」という文句に「管理」という言葉をくっつけて、「企業管理」の「学問」の超歴史的な一般妥当性を強調していて、マルクスが明記している「資本の機能として、指揮の機能は独自の性格をもつことになる」という肝心の文句を意識的に無視していられるとは、いったい、どのような「マルクス学者」先生でいらっしゃるのでしょうか？ これらの迷論理、迷文句の「専門家」の方がたには、エンゲルスがよくつかった「乾ぶ<sup>コリシテン・シャイサー</sup>どうの糞ひり」という「牧歌的」異名は、いちじるしく分にすぎたもので、むしろ、エンゲルスがかのデューリングに与えた厳正な総括的特徴づけのほうはずっとよくあてはまるのではないかと思われまふ。——

曰く、「誇大妄想による責任無能力」。

(完)